



はじめに

筆者が歯科衛生士になったころ、歯科衛生士は「死」と向き合うことのない職種でした。それから時が流れ、わが国は世界に類を見ない超高齢社会を迎え、「在宅医療・在宅介護」の時代に突入しました。同時に、訪問歯科診療が求められるようになり、続いて歯科衛生士による単独訪問が認められました。そのような訪問先は、多職種との情報共有と連携のもと、全身疾患を理解し、病態を把握したうえで診療をしなければならない場所でした。そして筆者は、患者さんの命の電池が切れるその日までを支援する、つまり歯科衛生士も「死」と直面する職種になったことに気づかされました。いま、「在宅医療・在宅介護」の現場では、訪問診療に関する知識と技術を身につけた歯科衛生士が行う専門的口腔ケアが必要とされています。

本書は、筆者が手探りで「歯磨き」ではなく「専門的口腔ケア」を追求し、師や志同じくした仲間と出会い、切磋琢磨した日々のなかから、苦労や無駄を削ぎ落とし、歯科衛生士による単独訪問の診療現場に必要な情報収集、口腔ケア、口腔リハビリ、食支援、終末期、旅立ち、そして多職種連携などを、できるだけわかりやすくまとめました。現場をありのまま写した衝撃的な写真や実情を多く盛り込み、訪問現場の温度を感じられる一冊になったと自負しています。本書が、これから在宅単独訪問をスタートする方や、いま悩みながら携わっている方への一助となれば幸いです。

最後に、発刊にあたり、デンタルダイヤモンド社編集部の木下裕介様に多大なるご支援をいただき、誠にありがとうございました。また、訪問歯科診療の現場で出会った方々には、写真などの掲載協力をいただいたことに深謝いたします。そして、資料のご提供などのお力添えして下さった日本訪問歯科協会様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2018年 夏
NPO 法人健口サポート歯るる
平松 満紀美